

## 4. フロアーで指揮

井出定利

### a 講師にやさしい演出とフロアーディレクターとの関係

スタジオという異空間に立ってカメラに向かって話すことは誰でも緊張する。この空間についての分析的な見方、そしてその場での講師にやさしい演出についての意図は報告書の他の章に詳しいのでそちらにゆずるとして、撮影される側と撮る側との間にたって行動するフロアーディレクター（以下FD）の存在と役割が大変大きいことを考えてみる。

#### ①人間的な手づくり空間の指揮者

スタジオは確かに慣れない講師の先生がたにとっては緊張する作業と時間をもった空間であるが、同時に大変人間的な（大量生産ができないという意味で）、もしくは職人的な手づくりの空間でもある。講師、カメラ、美術、照明等のスタッフが加わって、大量生産、機械化が難しい一回一回の空間である。そういうスタジオにあって、FDは担当ディレクター（プログラムディレクター、以下PD）の意を受けて、スタジオの中心的存在として「指揮」をとる役割を負う。つまり手づくり空間という意味でのリーダーである。講師にやさしく、且つ自由にいきいきと講義していただくカギをにぎる位置にいるといっても過言ではない。

#### ②スタジオの流れが全部その場で見られる一すばやい対応

例えば今回のアンケート調査によって出てきている先生がたの不満点（自由記述）からすぐに目につく点を下記にあげる。

- ◆顔や目の向き方が適正であったか不安を感じた。
- ◆複数のカメラのうちどのカメラを見ればいいのかよく分からず、あらぬ方向を見てしゃべっていることが時々あった。
- ◆注文や指示を遠慮なく出してもらった方がやり易い部分がある。
- ◆進行具合が順調な時も何かサインが欲しい（フロアーで）。内容構成や筋立て、TVで効果的なことなどアドバイスが欲しい。
- ◆「失敗したらやり直しましょう」との一言がどれほど楽になるかわからない。

例えばこのようなことは、FDの指揮によってただちに解消できるか改善できる項目である。録画が始まってしまうと講師は孤独な作業をひいられる。スタッフも緊張する。その間に立って全体の作業を見わたし、人間的なあるリズムをつくりだしたりすばやい対応をする存在としてFDの役割は大きい。

このように見てくるとスタジオのFDはディレクターにかわってスタジオ内の指揮をとるぐらいの存在理由がある。しかし現実には諸条件の制約により、一番内容を知っているPDは副調整室（通称サブ）に座り、外部組織のアシスタントの番組担当者がスタジオフロアーでPDの意を体して、しかし講師にやや遠慮しながら動くという形で番組づくりが進行している。今回の実験意図は番組の中心となっているPDがフロアーに下りる＝指揮をとることによって、講師にやさしい演出がもっと活かされるのではないかという仮説に拠っている。

実験理由には次の二つがあげられる。

①番組制作の責任者であるPDは講師との打ち合わせ等を通じて、その学問の内容や番組の

流れを把握し人間関係にも深いものがある。そのディレクターがフロアで指揮をすることは人間的な手づくり空間をとりもどし講師の緊張を解き、いきいきとした講義の雰囲気も従来よりは出せるのではないか。

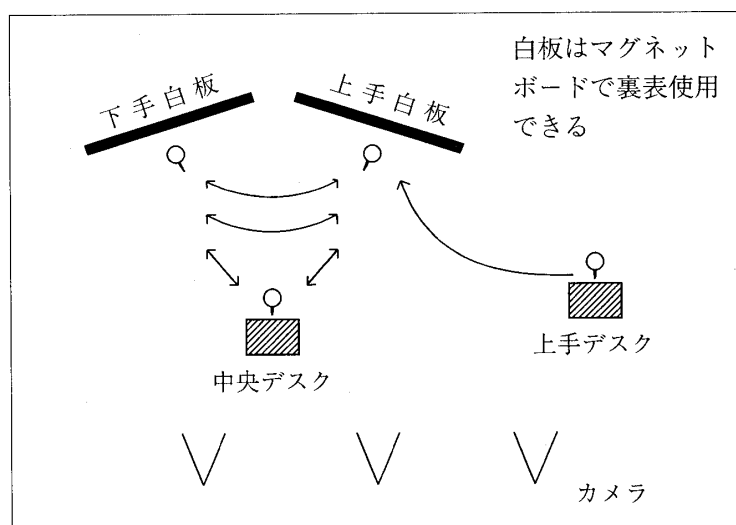
②このような手法は民法のワイドショーなどでは有効な手段として一部ではとり入れられている。即ちその日の番組全体の仕込みをしたディレクターがFDとなって下で指揮をとる。その理由は取材した当人が一番出演者の魅力やエピソード等を知っていること、各コーナーの出演者へのQ（合図）だしのタイミングが一番わかっている当事者であること。サブにあがって指揮をとるディレクターの仕事は中継的な意味あいの単純な映像カットの選択ですむこと、即ちドラマのような丁寧なカット割りは必要でなく、殆どアドリブですむというような場合。

以上のような条件下では中心となって動いたディレクターがフロアで指揮をとった方が手づくりの人間空間がとりもどせてスタジオの雰囲気が盛りあがる場合が多い。

## b 実験について

実験を行って比較した番組は『生物有機化学』の第4回「分子を見わける(1)」第5回「分子を見わける(2)」、7回「核酸のヒミツ(1)」と8回「核酸のヒミツ(2)」。担当講師は第4・5回がK講師、7・8回がS講師であった。なお担当PDがFDになった時には、サブのディレクターには他番組のPDが座って指揮をはたした。

### ①美術セット



講師の基本的な動きとしては、上手のデスクでその回の導入部（ねらい）を話し本題は上手、下手の白板前で図表を中心に話す。まとめは中央のデスクです。また挿入VTRの時などは中央デスクでリラックスして説明をする、ということにした。

②番組構成と指揮表

生物有機化学 担当K講師 実験日 平成7年11月13日

4回 (分子を見わかる①) PDがフロー・AM				5回 (分子を見わかる②) 通常形・PM			
ラップタイム	移動・動き	素材・動作	FDの動き	ラップタイム	移動・動き	素材・動作	FDへの指示
2' 23"	すわり (上手デスク)	オープニングVTR 導入部VTR (講師しゃべり)		6' 05"	すわり (上手デスク)	オープニングVTR 図表 1枚	Q (写り)
8' 20"		図表 2枚	Q (写り)		立ち移動 上手白板前	図表 3枚 はりもの等	Q (時間OK)
20' 20"	立ち移動 上手白板前	図表 3枚 板書、はりもの等	Q (立ち) Q (時間OK)	16' 50"	移動 下手白板前	図表 3枚 模型	
28' 45"	移動 下手白板前	図表 3枚 模型、はがし等	Q (時間OK) Q (VTRへ)	28' 15"	移動 上手白板前	図表 1枚	
32' 25"	すわり (中央デスク)	VTR (3' 35") 講師しゃべり	Q (しゃべり 合図)	30' 20"	移動 下手白板前	図表 3枚 はり、はがし等	Q (あと0分)
34' 40"	移動 下手白板前	板書	Q (写り)	40' 20"	すわり (中央デスク)	図表 1枚	Q (デスクへ)
38' 00"	移動 上手白板前	図素 3枚 はりもの等	Q (あと0分)	42' 53"	VTR	エンディング	
41' 50"	移動 下手白板前	図表 1枚 模型、はりもの	Q (デスクへ)	44' 00"			
43' 12"	すわり (中央デスク)	図表 1枚 はがし等					
44' 00"	VTR	エンディング	FD拍手				

同S講師 実験日 平成7年12月26日

7回 (核酸のヒミツ①) PDがフローア・AM				8回 (核酸のヒミツ②) 通常形・PM			
ラップ タイム	移動・動き	素材・動作	FDの動き	ラップ タイム	移動・動き	素材・動作	FDへの指示
8' 14"	すわり (上手デスク)	オープニングVTR		4' 20"	すわり (上手デスク)	オープニングVTR	Q (写り)
		写真テロップ (6枚) 模型	Q (写り) Q (テロップ のタイミン グを下から サブへ) Q (VTRへ)			写真テロップ 2枚 図表 1枚	
				4' 20"	移動	図表 2枚	
					下手白板前		
8' 43"		VTR (30") (事前に音入れ)	Q (時間OK、 いい調子 等)	13' 00"	移動	図表 2枚	
					上手白板前		
14' 00"	立ち移動 下手白板前	図表 2枚	Q (時間OK)	15' 30"	移動	図表 1枚 写真 1枚	Q (時間OK)
18' 00"	移動 上手白板前	図表 2枚	Q (モニター 動かす)	20' 50"	すわり (中央デスク)	VTR (1' 40") (講師しゃべり)	Q (VTRへ)
21' 14"	移動 下手白板前	図表 2枚	Q (時間OK)			VTR (3' 00") (事前音入れ)	Q (VTRへ) (時間OK)
28' 40"	すわり (中央デスク)	VTR (6' 35") (音ロケ入り)	Q (VTR中 自由に話す。 いい調子で す。次の打 合せ等)	24' 20"	移動	図表 1枚 写真 1枚	
					上手白板前		
33' 48"	移動 上手白板前	図表 2枚 VTR (6' 35") (音入り)	Q (モニター 直す)	28' 35"	移動	図表 2枚 写真 1枚	
					下手白板前		
41' 46"	移動 下手白板前	図表 4枚 板書等	Q (あと0分) Q (デスクへ)	33' 30"	移動	図表 3枚 はりもの等	
					上手白板前		
42' 55"	すわり (中央デスク)		Q (あと0秒)	35' 05"	移動	図表 1枚 写真 2枚	Q (あと0分)
					下手白板前		
44' 00"				40' 00"	移動	絵 3枚	
					上手白板前		Q (デスクへ)
				42' 38"	すわり (中央デスク)		
				44' 00"	VTR	エンディング	

③その他の参考事例（実験時に限ったことではないが）

◆白板前の照明は講師が右、左どちらを向いてもいいように当てる。講師の動きの自由を照明によって制限しないために。

◆さし棒は長めのものを使用。図表を指す時にさし棒の影がめだたないように。

◆図表の並べ方は内容の区切りを重んじた。したがって白板の1面に3枚あるいは4枚はることもあり、1枚であることもあった。板書、はり図表、はがし図表等も多くした。一つの面にはる図表は必ずしも順番ではなく、キーとなる図表は中心におき左右の図表との関連を読み取りやすくした。

◆講師にすぐ指示できるように何枚かのワラばん紙、太いマジックペンも用意。

◆講師に話したこと………図表の順番を追ってゆけば自然に講義が流れるように配置してあること。話の中に図表を入れるのではなく、図表中心に話をすすめてほしいこと。

………ドラマではないので間違ったら自由に言い直して下さい。おかし  
いと思ったらいつでもVTRを止めてそこからやり直します。で  
すからリラックスして自由にやって下さい。

………注文を出したのは、一つの図表の説明が終って次へゆく時などは  
できるだけ正面を向いて話して下さい、とうことのみであった。

なおリハーサルは4回とも1度実施した。

④実験中におけるFDの具体的な動きについて

K講師の時（第3回）

①K講師は最初にお会いした時から座ってやりたい、と言っておられた。それをシリーズ全体の方針として、立って且つ移動しながらの講義のメリットを説いて了承していただいた経緯がある。（メリットとして提示したことは次のようなことであった。座ってする場合よりも図表を大きく且つ立体的につくることができる。実験などをまじえてスタジオを広く使うことができ、また板書も可能なこと。構成的にも、あるメリハリのリズムをつけることができる。座った講義は受講生から、視聴していてなんとなく息がつまるような感じになる、といった不評の感想が多い、等であった。）

②前掲「番組構成と指揮表」におけるQ（合図）で心がけたことは次のような点であった。

－1「時間OK」の紙には「時間OK 大変いい調子です」などと書き、講師がリラックスし且ついいリズムを保てるようにした。

－2講義は全体として大変スムーズに進んだ。特に問題がない時には、モニター画面を見ながら進行と内容を確認してうなずきをくりかえした。→このことが後記インタビュー項目の2番目「PDがフロアにいる方がいい、うなずいてくれるから」という答えにつながっていると思われる。特に講師に向って意識的にうなずいたわけではないが、ちょっとしたFDの動作が講師に安心感を与えるようである。

－3講師は移動するので、モニターは1台、いつでも講師の目にはいるように動かした。

－4講師は横を向いて話すことが多く、表面を向いて話すべきところは合図を何回か送ったが、この点は思うようにはいかなかった。その主な原因は講師がカメラに視線を向けることを一般にきらう、ということのようであった。

－ 5 本編終了時には P D が拍手を送った。

S 講師の時（第 7 回）

㉑ K 講師は移動式の講義には何の問題もなかった。

㉒ 指揮表における Q の中身は K 講師の場合と殆ど変わりはないが、次の点は特徴としてとりあげられる。

－ 1 本編中、6 分強のインサート V T R が入った。音声もロケ現場で入れてしまったので、この間は講師は完全に自由であった。P D もこの間は講師のそばに行き、拍手の動作を送って大変うまくいっていること、何か注文がないか等の雑談？の時間をもった。講師は笑顔で答え完全にリラックスしていた。

－ 2 K 講師の時はうまくいかなかった正面を向く合図にも S 講師はよく応じてくれた。

－ 3 通常の形式の時、次にどんな内容の V T R が入るのか講師が忘れてしまい進行が混乱した。そのことが後記インタビューの第 1 項目で「次の V T R の内容がなんであったか忘れてしまう時がある」と答えている内容である。F D の指揮があいまいであると合図に明確さを欠く結果となる 1 つの事例として表われている。

⑤録画終了後のインタビューから

○おつかれさまでした

今日の収録は順調に行きましたか。何かとまどったりしたことはありませんでしたか

K 講師  
特になし

S 講師  
次の V T R の内容がなんであったか  
忘れてしまう時がある

○ディレクター（P D）が副調にいるのと下にいるのとでは、何か違いを感じましたか。

どちらが落ち着いて講義できましたか。

K 講師  
P D がフロアーにおられる方がいい  
うなずいてくれたから

S 講師  
P D がフロアーにいた方が安心

○どちらの方が満足のゆく講義でしたか。

K 講師  
N A

S 講師  
どちらも満足

○どちらの方が講義の流れが自分の思いど通りにゆきましたか。

K 講師  
P D がフロアーの方が合図がはっきりしていい

S 講師  
P D がフロアーにいるとサジェスチョン、指示が的確。困った時、その場できける

○PDの指揮の取り方に関して何かアドバイスや注文がありますか。

K 講師  
なし

S 講師  
なし

○次回からの収録ではどちらを希望しますか

K 講師  
PDがフロアー  
但しすわってやりたい

S 講師  
PDがフロアーにおりた方がいい

○その他、収録に関して注文などありましたらお聞かせ下さい。

K 講師  
なし

S 講師  
カメラハの時、上と下のスタッフ同士  
のしゃべりが気になった  
正面の場合、どこを見ていいのかわか  
らなかった

### c 考察

#### ①心拍数変化率表から

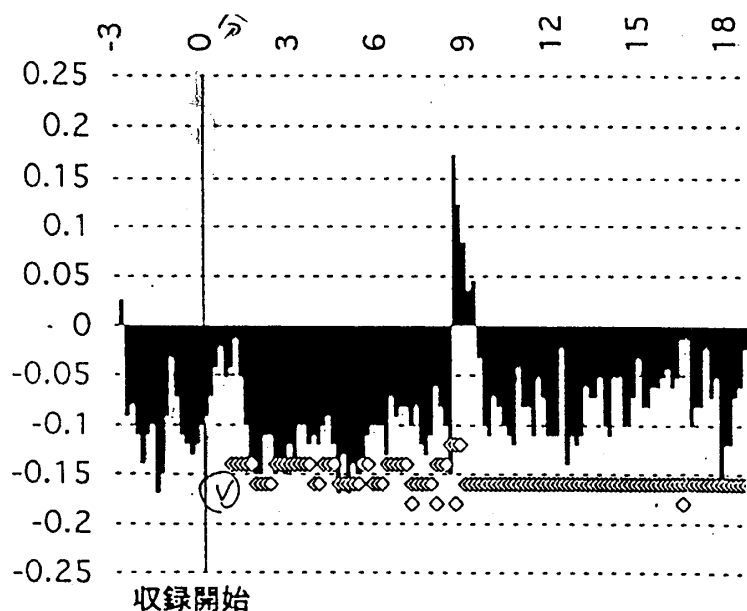
心拍数（別表）からは2人の講師の結果が逆になった。

即ちK講師の場合、PD（注：心拍表ではチーフDとなっている）がフロアーに入った時（第4回・AM）の方が通常の形式（第5回・PM）の時よりも全般的に心拍数が高くなっている。しかし番組収録後のインタビューでは、PDがフロアーで指揮してくれた方がやりやすいと答えている。その理由として、うなずいてくれるから、合図がはっきりしていていい、等があげられている。これはどう解釈したらいいか難しいが、1つの理由として考えられるのはK講師がインタビューの中で、次回からはすわってやりたいと答えていることである。K講師は4年前にも1度ご出演の経験があり、その時には座りの講義であった。今回もすわってやりたいと主張されたが、PDがフロアーで指揮をする実験なのでスタジオを広く使ってやりたいこと、立ちと動きのある講義のメリットなどを説いて承諾していただいた経緯については前述した。従って初めての動きのある講義で、PDがフロアーで指揮をとったにもかかわらずテンションが高まったのかもしれない。

あるいはPDがフロアーに下りたこと自体がK講師の緊張を高めたことも考えられる。なぜなら前述したような経緯によってPDも、S講師の時よりもやや緊張が高まっていたからである。しかしK講師はPDがフロアーにいた方がいいと答えておられるから、この場合、原因としては立ちー動きという形式によるものと考えた方が自然である。また次回からはすわってやりたいと答えていることにも、立ちー動きの講義形式への抵抗が見られるからである。PDがフロアー時の心拍数のパターンを見ると、始まってから24分ぐらいまでは高く、それ以後

はさがってきている。そしてその後に収録した通常パターンでは、これも同じ立ち一動きの講義形式であったが殆ど緊張は見られない。台本を持たないで（後述）、立って動きながら話すという形式に慣れていったパターンと考えられる。

S 講師の場合は、TV 出演は初めてであったがはっきりした結果が出て成功した事例とみられる。PD がフロアーに入った時（第7回・AM）は殆ど緊張は見られない。下図はPD がフロアー指揮をした時の最も特徴的な部分を取りだしたものである。開始してから9分頃、上手のデスクから立ちあがって白板前に移動する時心拍数が増加しているだけである。その他心拍の分析表にも報告されている通り、殆どの講師が開始直後に心拍数の上昇があるがこの場合には見られない。また次のようにも指摘されている。「カメラを注視している時に心拍数が増大する講師が多いなかで、この講師の場合ディレクターがフロアーで指揮をとっていた場合、講義前半のカメラ注視が多い場合にも心拍数が増加していなかった」



逆に通常の形（第8回・PM）の場合はただ1つ挿入VTRの部分のをぞいて、全体としてあきらかに心拍数の増加がよみとれる結果となっている。そしてインタビュー結果もPDがフロアーにいた方が安心であるといい、理由として指示が的確であることをあげている。

従ってS講師の場合にはPDがフロアーで指揮をとることの有効性が感じられるパターンである。しかしながら事

例も少ないし、K講師の場合は全く逆のパターンとなっているので今後の調査をまたねばならない。

## ②自由にいきいきと一の関係として

今回の『生物有機化学』のシリーズでは15回を通じて、講師が立ち且つ動いて講義をする時には台本を持たないで講義を全うしたことは特筆に値する。この実験の時も4回とも講師は台本を持たなかった。

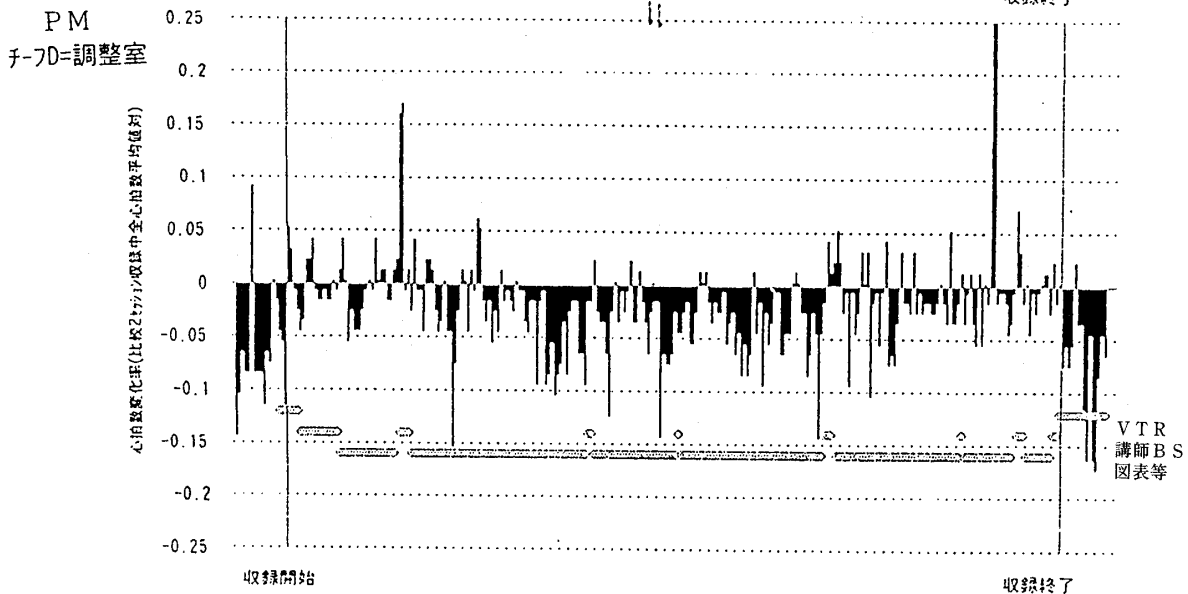
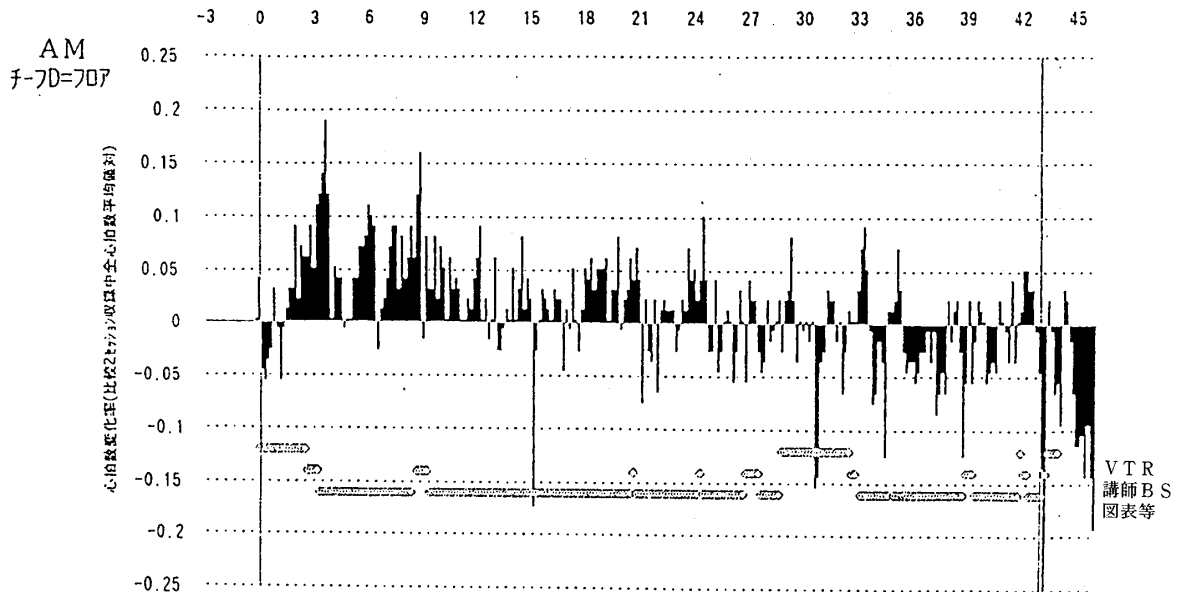
但しこれはFDの問題よりは、図表の並べ方を美術館方式というスタイルにしたことによるのではないと思われる。つまりこの方式は図表その他の配置の仕方によっては、講師を台本による束縛から開放して、この実験調査のねらいである自由にいきいきとした講義を実現する1つの可能性を示していると考えられる。そして今回のようにスタジオを広く使う場合は、PDがフロアーにいて指揮をとることは一層力を発揮すると思われる。そのことは少なくともインタビュー結果から、即ちPDがフロアーにいることの良さを2人の講師が積極的に評価した姿勢からうかがい取ることができる。



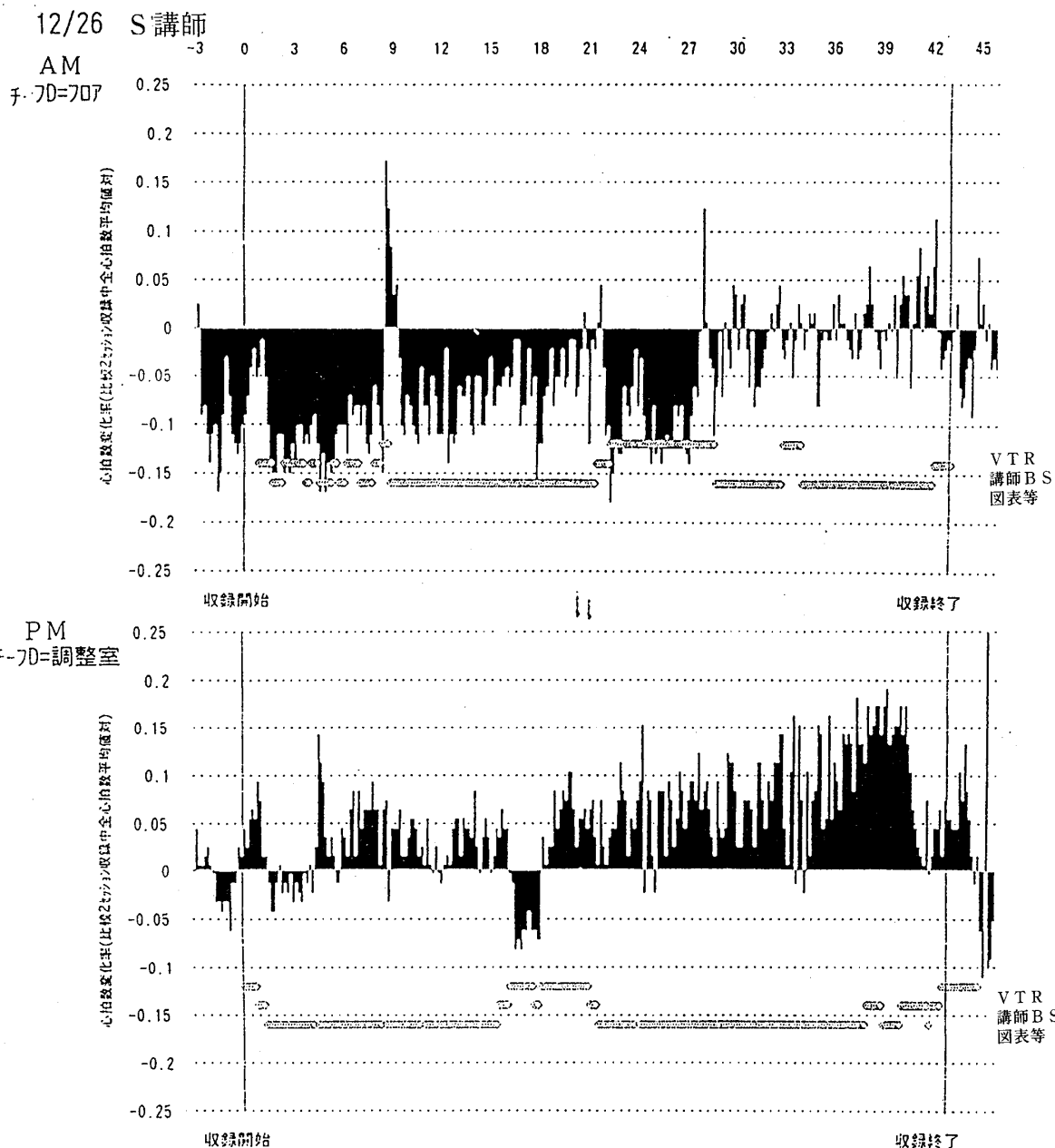
③今後の課題として

PDがフロアディレクターになることは、今までみてきたように番組づくりの改善策としては可能性がある目標である。しかし現状ではそのためにサブにもう一人PDが指揮のためにすわらなければならないという問題がおきる。今回の実験もそのようにして実現したわけである。であるからシステムとして実現してゆくにはいくつかの条件整備が必要である。さしあたって何が必要かということになるが、現行の枠の中で考えるならばFDの役割への十分な配慮と指導が必要であるということになる。

11/13 K 講師



- ・収録開始直前に心拍数は上昇をしめた。
- ・収録の終了直前での心拍数の上昇は、あまりみとめられなかった。
- ・チーフディレクターが調整室で指揮をとっていたときの方が、全般的に心拍数は低かった。



- ・ディレクターがフロアで指揮をとっていたときの方が、全般的に心拍数は低かった。
- ・ディレクターが調整室で指揮をとっていた場合、収録開始直前に心拍数はいちじるしく上昇したが、フロアで指揮をとっていた場合はそれほどの心拍数の上昇はみられなかった。
- ・講義終了が近づくとつれて、心拍数は上昇し、収録終了後、急速に低下した。
- ・VTR呈示中の心拍数は比較的低くなる傾向があった。
- ・カメラを注視しているときに心拍数が増大する講師が多いなかで、この講師の場合、ディレクターがフロアで指揮をとっていた場合、講義前半のカメラ注視がおおい場合にも心拍数が増加していなかった。